

ボランティアの声

サンゴ礁保全プロジェクトでは、
社員や一般の方々がボランティアとして参加し、調査研究活動をサポートしています。
沖縄、ミッドウェイ、セーシエルのプロジェクトに参加した方々に、感想やご意見をいただきました。

沖縄

10年以上ダイビングをしてきましたが、1998年に起こった白化現象を目の当たりにし、サンゴがどんどん枯れて死んでいくのを大変に悲しく思っていました。個人でできることには限界があり、何もできずにいましたが、会社がこのプロジェクトを推進してボランティアを募集していたのを見て、ぜひ参加したいと思いました。



新エネルギー・環境に関わる仕事に携わり、環境やエネルギーといったことに意識を持ちました。特に地球が直面する温暖化に対して、個人として何ができるのだろうかと考えた時、問題意識は持てるものの、具体的なアクションにつながりませんでした。そんな中、社内通知においてサンゴ礁保全プロジェクトを知り、まずはアクションの第一歩として、環境問題に対する能動的な取り組みを開始しようと思ったのが参加のきっかけでした。

自然やサンゴや海について、じっくりゆっくり考えてみるよい機会となりました。こういう機会に沖縄という地で、世界最先端の研究に触れられたことは大変幸運で、いろいろな意味で素晴らしいプロジェクトだと思います。



自分があの5日間に活動したことがどれほどの価値のあることなのかはよくわかりませんが、今後サンゴ礁に関する画期的な発見が見つかり、それが自分の関わっていたプロジェクトによるものであったら最高だと思います。

以前訪れたカンクーン、グレートバリアリーフ、パラオなどの美しいサンゴ礁が10年位前から、大きな被害（白化現象）が出ているとのニュースを聞いて心を痛めていました。今回この調査に参加することができ幸運でした。

もともと実験に興味があったため、通常お手伝いをするのができないラボでの作業は非常に楽しく、貴重な体験になりました。鈴木先生たちの講義に参加できてよかったです。

サンゴの生態が私たちの日常の暮らしといろいろ関わっていることを知りました。今回の沖縄での経験を、機会があれば周りの人たちにお話し、その理解を深めるよう働きかけたいと思っています。今回瀬底の研究センターでお世話になった静岡大学、琉球大学の皆さんに感謝します。

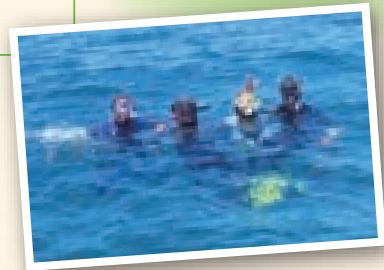
研究チームリーダー（沖縄） 静岡大学 鈴木 款 教授

本プロジェクトがスタートして4年が過ぎました。この4年間で、プロジェクトの目的である“サンゴの白化の科学的メカニズムの解明や新たな再生方法の科学的検証”という課題に大きな前進をしたと思います。今までの常識とは違う新たな成果を得られたのは、このプロジェクトを全面的に支えている三菱商事のスタッフ、ボランティア、研究者、学生の情熱と意欲と和のおかげです。残りの2年間はさらに、産・学・民が一体となり、世界に誇れる成果を出していきたいです。

ミッドウェイ

今回の体験のおかげで、私は自分の生活スタイルを変える努力をするようになりました。具体的には、自動車の運転を控えたり、ビニール袋を再利用したり、責任を持って買い物をしたりといったことです。自分の周りで環境によくない行為を見かけたときは、注意することなどを実践しています。

このプロジェクトでは、さまざまな作業を体験しました。スキューバ tanks の空気充填など装備の準備、修理、清掃などの肉体労働作業から、現場でのサンプルおよびデータの収集作業、確認・文書化作業の補助にいたるまで、非常に多岐にわたりました。



このボランティアプログラムは、体力が必要な面もありますが、極めてユニークで美しい環境の下、多彩な経歴と職歴を持つボランティア同士が科学的海洋研究に参加できるという素晴らしい機会を提供してくれます。他の人にもぜひ勧めたいと思っています。

今回の活動により、健全な海洋と、その自然変化とのバランスがいかに微妙なものであるかを知りました。人類が自然に対していかに弊害をもたらしているかも理解することができました。私たちの大地、海、空を大切にしましょう。私たちが生きている間、残しておけばいいというものではありません。永遠に残していかなければならないのです。



セーシェル

参加する前は地球温暖化についてあまり知らなかったのですが、今は環境のことを注意深く考えるようになりました。この経験によって、環境に対する考え方が確実に変わりました。自分が周囲の環境にどのような影響をどのくらい与える可能性があるかについて、今まで以上に意識するようになったと思います。

島はトロピカルなビーチ、山々、ヤシの木に囲まれた美しい場所でした。生物の種の数の変化を確認するのに役立つ基本データを収集するボランティア活動は、大変やりがいがありました。背中に太陽の光を浴びながら海で作業をすることは、机の上で作業するのとはまったく異なる体験でした。



今回の体験で、自然は、急速に変わりつつある環境に対応しようと闘っているのだと痛感しました。これからも、できるだけ、このプロジェクトに対し支援を続けていきたいと思っています。

科学的調査とは、中に何が入っているか期待せず箱を開けることなのだ今回体験から学びました。このプロジェクトに参加する上で大切なのは、結果について先入観を持たず、発見した事柄から学ばなければならないということだと思います。これこそ調査の真の目標なのだ教えられました。